

源融と塩釜の深い関わりは、物語や能、歌など数多くの文献に描かれています。

「伊勢物語」にみる源融と塩竈

◆伊勢物語「塩竈」第八十一段

作者不明 ◆

むかし、左大臣源融という方がいらつしやつた。鴨川の岸の六条の辺りに、家を風流に造つて住んでおられた。

十月の末近く、菊の花がもう盛りをすぎて、紅葉も様々に見られるときに、親王たちをお招き申し上げて、一晚中酒宴を催して管弦を樂しみ、夜が明けてゆく頃、この邸宅の素晴らしさを讃える歌を詠み合つた。

その時、そこに卑しい翁がいて、板敷の下を這い歩き、人々がみな歌を詠み終わつてから詠んだ。

塩竈にいつか来にけむ朝なぎに
釣りする舟はここによらなむ

塩竈にいつのまに來てしまったのだろうか。朝風のうちに釣りする舟は、ここに寄つて來て欲しいものだ。

「能」にみる源融と塩竈

◆能「融（とおる）」◆

汐汲みの老人が、源融の化身として登場します。

と翁が詠んだのは、陸奥の国へ行つて、山水の美に富んでいる所が多かつたが、日本六十余国の中で、塩竈という所に似たところはなかつたので、翁は、この邸宅を愛でて、「塩竈にいつのまに來てしまったのだろうか」と詠んだのであつた。

都六条河原院で休息していた東国からの旅僧の前に、田子桶を担いだ老人がやつてきて、私はこの所の汐汲みであるという。僧は都のなかに汐汲みが居るはずはないとなじると、「ここは昔、融の大臣（おと）と）が陸奥の塩竈に模して造られた所だから、汐汲みといったのは当然だ」と答える。折から月が昇つてきたので、二人で籬が島の景色を眺め、また付近の名所を訪ね合い、さらに融公の故事を語り合つていた。

やがて老人は水を汲むかと思つと、そのまま姿を消してしまつた。

紫式部の詠んだ歌

◆新古今和歌集 ◆

みし人の煙になりし夕よりなそむつ
まにしほがまの浦

死んでしまつた人が煙になつてしまつた夕暮れ時、塩釜の浦の煙がどうして慕わしく感じないことでありましょうか。

浮島は塩竈沖に

奈良時代の女流歌人山口女王（やまぐちのおおきみ）が

塩竈のまへにうきたる浮島のうきて
思ひのある世なりけり

と詠つた「浮島」は多賀城の浮島ではなく、「馬放島（うまはなじま）（一名青海島）」だったという説があります。

（鹽松勝譜 卷八之一）